

特集にあたって

鶴飼 孝盛 (東海大学)

弊誌では、2015年11月号 (Vol. 60, No. 11) において『海外へ行こう!』という特集を組み、米国、欧州におけるオペレーションズ・リサーチを取り巻く現状をお伝えしました。そこでは、海外での研究生生活の楽しさとともに、ORがどのような位置づけにあるかといったことが紹介されました。このように海外に目を向ける一方で、足下に目を向けると、日本OR学会の活動、ひいてはORそのものに対する世間一般の認識が、日本においては十分ではないのではないかと思います。このことは、ORの面白さや魅力、実力を伝えるという弊誌の目的が十分に果たせていないことを意味するのではないのでしょうか。

弊誌の特集は、最適化理論や待ち行列といった「ORの技法」そのもの、鉄道や天気といった具体的な「適用事例」に注目したもので、それらの「折衷」あるいは適用事例が一つの技法として独立したもの（たとえば、ファイナンス）、そしてOR、OR学会の「歴史」などに大別することができます。また、その内容や水準は、最先端のちょっと（かなり？）難しい、尖った研究をなるべく平易に紹介したものから、高校生を対象として想定したもの、初学者、専門外の人々へのきっかけづくりを目的としたものといったように、「面白くてためになる」ことを目指して組まれてきました。もちろん、そこにはORの素晴らしさを知ってもらおうという意識が根底にあり、手前味噌となってしまいますが、事実そのどれもが大変面白く、ためになるものでした。しかし残念なことに、弊誌の読者はすでに学会員である方がほとんどで、すでにORの素晴らしさを十分にご存知な（どっぷりと漬かった）方が多いです。こんなに面白いことを、もっと広く、社会の多くの方々を知ってもらおう（引きずり込む）にはどうすればよいのでしょうか。その窓口が、研究発表会であり、ORセミナーであり、その他諸々の本学会の活動であるわけです。

本特集は、公益社団法人である日本オペレーションズ・リサーチ学会のさまざまな活動を、単に学会員間における情報交換に留まることなく、広く社会一般の

方々にも広報することを第一の目的としています。特集の前半では、学会やそれぞれの支部が行っている活動を紹介していただきました。弊誌には、普段からその活動報告が掲載されておりますが、そこに割かれるスペースは少なく、概要をお伝えするに留まっています。また、開催されるイベントは、MLなどを通じて周知されているものの、どのようなものであったのか、十分に認識されていないのではないかと危惧されます。学会ならびに支部の活動に焦点を当てることで、これまで実際に参加することでしか知ることのできなかった、学会の催しの雰囲気や伝え、会員相互の理解を深め、交流を促進する一助となることを願っています。さらに、弊誌を目にする機会の少ない非会員の方へ、本特集を紹介していただき、これらの催しを広く知らしめることで、参加の呼び水となれば嬉しい限りです。

ところで、本学会の特徴として、またORという学問分野の特徴として、大学などの研究機関とともに、公的ならびに民間企業に所属する会員が多数存在する点が挙げられます。そして、ORが活発であるためには、双方の存在が不可欠です。そのためには、お互いが何を望んでいるのか、学会に、学会を構成する人々に対する期待を知る必要があるのではないのでしょうか。もちろん、一方からすれば道理に合わないこともあると思います。妥協できる場所、譲れないところを認識することで、不要な摩擦を回避することができます。私は未熟なのでわかりませんが、先達の教えによれば、このあたりは結婚なんかと同じと伺っています。

本特集の第二の目的は、研究機関と企業、それぞれ異なる世界に身を置く会員が、どのような期待をもっているのかを知ることにあります。本学会に対する期待や要望を探るために、本学会会長を含めた座談会を開催しました。その様子をご紹介したのが、本特集の後半部分になります。

本学会の活動と、本学会に対する期待、これらを合わせることで「日本におけるオペレーションズ・リサーチ」がどのような状況にあるかをお伝えいたします。